内村鑑三

原島　正

序　三つの後悔

内村鑑三（一八六一―一九三〇）は、今から丁度一〇〇年前の一八九八年の七月葉山で開催された基督教青年会主催の夏期学校で「今日の困難」と題する講演を行なっている。その講演で内村は、ある宣教師に「悔ゆることが三つあります」と語ったことを紹介する。その三つの悔いることとは何か。（全六―五六以下）

第一は、此世に生れて来た事。
第二は、西洋へ行った事。
第三は、基督教を信じた事。

第一の「此世に生れて来た事」は、この講演で「我々は此困つた時代に此困つた国に生れて来た者」と述べているように、この時代にこの日本に生れて来たことを悔いると読むことができる。[1] このことを福沢諭吉（一八三五―一九〇一）と比較すると対照的である。福沢は周知のように『文明論之概略』の「緒言」で、「今の時は殊に大切なる好機会というべし」と述べている。つまり「困難なる課業に当るといえども、ここにまた偶然の僥倖なきにあらず」なのである。

第二の「西洋へ行った事」は、内村によれば西洋に行かなければ「日本国の悪き所が見えずして其改革の要を認めなかつた」というのである。このことも福沢と対照的であ

る。福沢は西洋を知り、西洋の紹介者になれたことを後悔するどころか、誇りに思っていたのではないか。内村にとっては、西洋を知ったことは、日本の現状に違和感を覚え、西洋を知ったこと（実際の西洋体験は二四歳から二八歳まで四年間アメリカで暮らしたことにすぎないのであるが）を後悔すると述べる。さらに内村は、「基督教を信じた事」を後悔する。内村はこの日本で基督者になったことは「実に不幸」なことであり、「身を処する上に非常の困難を来す」と言う。その理由として、内村は日本がその地理学上の位置からも、国民の思想に於ても東洋の一部でありながら、他方基督教が西洋から来たもので、西洋を作ったものは基督教であるから「基督教を信ずれば精神的に西洋化」される。そして日本は捨てるわけにはいかない、「否な前よりも深く日本を愛する様に成つた」のである。日本と基督教の狭間に立たされたのである。内村の言う「二つのJ」（Jesus と Japan）である。けれども、この講演では「私の思想に是が為めに大変動が来り、私は東洋主義を擲げ捨つる様になつたのは確である。」と述べている。そこにはいつも苦痛が伴なっているのである。ところで内村にとって、この日本（東洋）と西洋の違いが明確に示されるのが「義理と義務」の違いである。そこで、次に内村が「義理と義務」をどのように考えていたかを考察することにする。

1　義理と義務――その一

内村は「義理と義務」を次のように述べる。全文を引用して対比する。

「日本倫理に義理ありて西洋倫理に義務（ヂユーチー）あり、義理は情的倫理にして私的なり、是に反して義務は理的倫理にして公的なり、前者は情に従ひ後者は理に則る、義理は情愛に富むも不公平なり、義務は不人情の如くに見えて公平なり、義理は家族的道徳にして、義務は国家的道徳なり、薩長政府の不公平なるは其義理に縛ばらるるが故なり。北条政府の公平なりしは其義務を重んぜしが故なり、義務の観念に薄くして国政は永久に持続し得べきものにあらず。」（「義理と義務」一八九九年八月、全七―二四九）

義理　日本の倫理　情的倫理（情に従う）　私的
　　不公平　家族的道徳　薩長政府
義務　西洋の倫理　理的倫理（理に従う）　公的
　　公平　国家的道徳　北条政府

ここで言う、「家族的道徳」とは忠孝に代表される儒教道徳である。内村は「日本人の倫理」として、「君に対しては忠、父母に対しては孝、兄に対しては悌、夫に対しては貞を説きしも、社会てふ公的集合躰に対する義務なるも

のを教へざりしなり」と述べ、日本には「文明諸国に於て唱道せらるゝ公的生涯なるもの」がないことを批判する。（「日本人の倫理」一八九九年八月、全七―二四八）

内村によれば、家族的道徳である忠孝では、国家という「公的大団躰に応用して其効力は甚だ微弱」である。国家を経営するためには、国家的道徳を必要とするのである。その国家的道徳とは「公平を愛するの念」であり、「自由を貴ぶの心」である。そして「忠孝の上に建設せられし国家は其基礎の小なるが為に斃れむ、自由と公道とを土台とする国家は永久に栄えむ。」というのが内村の主張であった。（「国家的道徳としての忠孝」一八九九年四月、全七―一九）

上記の「義理と義務」の文章で注目すべきは、薩長政府と北条政府を対比していることである。内村が両政府について記している文章を次に引用する。

「名義の立派にして実行の挙らざるは薩長政府なり、名義の拙くして実行に最も富みしは北条政府なり、前者は尊王愛国正義公論を唱導し、政権を握て未だ三十年ならざるに、真道日々に衰へ、奢侈日々に増加し、吏は傲にして驕、民は僻にして惰、後者は賊名を千載に垂れ、大義名分に誇るべきなくして、一百五十年の長き、日本歴史の未だ曾て認めざる高尚厳粛なる政治を我国に供したり、若し名を以て云はん乎、松方正義、伊藤博文、後藤象二郎、大隈重信等は皆義士なり、忠臣なり、若し実を以て評せん乎、北条泰時、同時頼、同時宗等は日本国民の恩人なり、余輩は敦れを選ぶべきかを知らず。」（「胆汁数滴」二十三　薩長政府と北条政府、一八九七年四月、全四―一三二）

2　義理と義務――その二

内村は義理について次のようにも記している。

「日本の社会に義理なるものがある、是は外国に於ては決して見ない所であつて、是が為に苦められるものは東洋の日本人に限る。

義理とは義務ではない。義務は宇宙の大道を尽すことであつて、是は極く高尚の事である、然し日本で称ふ義理なるものは詰らない社会の習慣に従ふ事であつて、是は極く卑屈の事である、そうして義務の念には至て薄い日本人は義理のためには殆んど全生涯を費しつつあるのである。（中略）義理は日本人の精神を縛る縄である、是あるがために彼等の思想も発達しなければ、政治も腐敗する、是れあるが為に日本には真正の忠臣も孝子も義士も出て来ない、（中略）其義理の念が変じて義務の念となるまでは日本国は至て詰らない国であると思ふ。」（「義理」一九〇〇年一一月、全八―四五七）

ここに「義理とは義務ではない」と述べられている。そして義務は「宇宙の大道に尽くす事」であり、「高尚の事」である。他方、義理は「詰まらない社会の習慣に従う事」であり、「卑屈の事」である。「日本人を縛る縄である」とも言う。その義理の習慣の例として内村は、「使い物」「進物」の販売による商売の繁盛していることを挙げて、「日本人の中から義理なるものを取り除いたならば彼等の商売の半分はなくなるであろうと思ふ」と述べる。[2]

内村は「義務」で人が救われるとは考えていない。義務が重荷となることを知っている。例えば、初期の作品『求安録』で次のように述べている。

「義務よ、義務よと叫ぶものは能く義務を果す人にあらざるなり、義務の念は荷担となり、心志を圧してその活動力を減殺するものなり、如何に面白き学科も学校の課目となりて強ひらるゝ時はその甘味返て苦味と変ずるが如く如何に高尚なる事業も義務として之に当る時は乾燥無味の奴隷的事業と変ずるなり。」（全二―二二〇以下）

内村にとって伝道や慈善事業は、義務として為すのではない。道楽（Hobby）である。[3]「基督の救に与かりてより義務を尽すは快楽と変ずると同時に罪を犯すは苦痛と変ずるなり、善を愛し悪を悪むの念は始めて此時に起るなり。」（全二―二二二）

3　日本と基督教

序で述べたとおり、内村は日本と基督教の狭間に立たされた。基督者になったために、日本との関係で異邦人となってしまったと言ってもよいであろう。それでは、基督者内村は、どこで日本［広く東洋］と「衝突」したのであろうか。内村の文章を引用する。

「東洋の社会は人倫と称する情実的道徳に由て成立つ者であります、然るに基督教は多くの場合に於ては此種の道徳を顧（かへりみ）ない者でありますから、茲に此社会と此宗教との間に非常の衝突が起るのであります。」（「信仰維持の困難」一九〇四年一二月、全一一―四八三以下）

ここで「衝突」と述べられているが、おそらく内村は井上哲次郎著『教育ト宗教ノ衝突』（一八九三年）を考えていたに違いない。当時の多くの基督者たちは、井上に基督教は決して日本の道徳に「衝突」しないと論駁したのであるが（その文献は『井上博士と基督教徒』三冊に収録されている）、内村は「衝突」は止むを得ない、「世に若し基督教と情実的道徳とを調和せんと計る者がありますれば其人は無理を企つる者であります」と述べる。[4]

内村によれば、「基督教は神の教えでありまして、是は

純正義であります」。そして神の子としての基督信者には、君もなければ、親もなく、妻子、兄弟もない、「神の前に独り立たる霊魂は実に不人情なる者」だと言う。けれども、基督信者も「情の動物なる人」である。どうしても、情の絆を断ち切れない。そこで、基督教から離脱してしまう。「我等日本人に取て最も辛らいことは理に反くことではなくして、情に逆ふことであります。」（同書）日本人の最大多数にとって、「情と道理」が一つであり、「不人情者」は「大悪人」の代名詞だと言う。

4　正義と道理と人情

以上の内村の文章から、「正義」と「道理」と「人情」をキー・ワードとして選ぶことができる。それでは、この三つについて内村は、どのように考えていたのだろうか。

「人生の問題を解決するに方て、第一に考ふべきは正義である。第二が道理である、第三即ち最後が人情である、此順に従つて解決せん乎、万事は容易に解決せらる。」（「義理と人情」一九二二年七月、全二七―一七八以下）

内村によれば、人生の問題の解決に「正義」「道理」「人情」ともに必要である。大切なのは、この三者のどれが最も肝要かということである。優先順位である。「第一は正義である」。何故なのか。「基督教の神は厳父である、慈母でない、彼は正義に由らずして近づく事が出来ない」からである。つまり、基督教の神は、正義の神であり、「正義に由らずしては人を救け給はない」のである。従って、我々も、先ず正義を基準に物事を判断し、実践して行くことを内村は勧める。「縦し其道は十字架を通過するとも。」

「第二は道理である」。内村は「人間は特に道理の動物である、文明と云ひ文化と云ふは人生に於ける道理の実現に外ならない。」と言う。そして、常識とは、「道理が人類の永き実験に裏書せられ」たものであり、最も信頼すべきものである。そして基督教は「正義に基き道理に適う罪の赦しの道」である。

内村は道理を重んじる。そして基督教が道理の宗教であることを主張する。

「宗教は感情ばかりではない、又深い静かなる道理である、道理の解釈に苦む者に向つては道理を以て之に応じなければならない。」（「医術としての宗教」一九〇七年一二月、全一五―二九九）

「基督教は如何に見ても道理の宗教である。人に良心が有り、彼が罪を犯す間は基督教の必要は止まない。基督教が供する罪の赦しの途が無くして、人に真個の平安は有り得ない。神が罪人を義として自から義たり給う道は基督教

を除いて有り得ない。科学と合致し得るや否やの問題ではない。良心を満足し得るや否やの問題である。」（「私の基督教」一九二九年五月、全三二―一〇八）

「第三は情である」。内村は決して情を否定しているのではない。「情は人生の花であり、実である、生命其物であると言ふことが出来る」と述べる。情があってこそ、詩と歌が出来る。さらに家庭と国家を作るのも情である。けれども、「情は情として単独で立つ事は出来ない、情は理に由つて支配され、義に拠つて立つて、情は脆くある、変り易い、倚り難き者にして情の如きはない」というのが内村の考えである。このことは、内村の日本人批判に直結する。「日本人は特に情の民である」。情が日本人の行動の原動力になっているということだろう。日本人に煩悶の多いのは、このためであり、「日本人は情と情との間に挟まれて煩悶する」と内村は考えている。このような、日本人に基督教を説くならば、必ず「激烈な反対と、其結果としての孤独を覚悟しなければならない」。そして、正義の道は、「不人情」のように見える。この「不人情」こそが、前述のように日本人がどうしても赦せぬことなのである。情の人は近くに、義の人は遠くに、ということになる。義人は、敬遠されるのである。預言者もイエスもその一人であった。

先ず聴くべきは義、次が理、情は重んじても最後なのである。[5] そして「単独を期して神と共に歩む、其れが本当の基督者である。」と内村は、結論として述べている。ここに「神の前に独り立つ」という単独者として生きようとする内村を見る。そして「我ここに立つ」と時の権力者たちを前に述べたM・ルターを想起する。ルターから「近代」が始ったとすれば、内村は「近代人」であった。内村の「近代人」批判にかかわらずである。

「義」「理」「情」についての内村が述べていることを対比しておく。

「義」　堅い者　正義　信仰性
　　希伯来人に由つて代表される　預言者（義の人）

「理」　冷い者　道理　修得性
　　希臘人に由つて代表される　哲学者（理の人）

「情」　温い者　人情　天然性
　　日本人に由つて代表される　歌人（情の人）

結論　新渡戸稲造の義理観との比較

最後に新渡戸稲造著の *Bushido* (1899 or 1900) で「義理」がどのように述べられているかを紹介し、内村の「義理」観との比較をする。[6]

新渡戸によれば、giri（義理）という文字は、Right

Reason（正義の道理）であって、「単純明瞭なる義務を意味した」。つまり、「『義理』の本来の意味は義務にほかならない」のである。義理は義務であって、別のものではない、というのが新渡戸の *Bushido* での見解である。そして、義理の対極は愛であり、義理は、「人為的に作り出されたもので、動機としては基督教の愛の教えに甚だしく劣る、第二義的な力」である。新渡戸は、義理が愛へと高められることを願っていたのである。新渡戸によれば、「義理」という語ができた理由は、次の通りである。「我々の行為、たとへば親に対する行為に於て、唯一の動機は愛であるべきであるが、それの欠けたる場合、孝を命ずる為めには何か他の権威がなければならぬ。そこで人々はこの権威を『義理』に於て構成したのである。」

内村は、「義理は義務ではない」と両者が違うことを強調する。二人の見解の違いは、その主張の動機の違いに由来する、と言えよう。

新渡戸が英文で *Bushido* を執筆した動機は、日本の文化が西洋のそれと、異質なものでなく、同じであることを外国人に判ってほしいということにあった。それ故、孝については「この徳に関する西洋人の感情を私が知らない」という理由で、書くことができなかったと述べている。（増補第一〇版序）

したがって、新渡戸は「義理の本来の意味は義務にほかならない」と両者には違いがないとしたのである。

他方、内村は、義理と義務の違いを明らかにし、義理ではなく、義務に生きることこそ、本来のあり方であると考えた。それ故「義理の念が義務の念となるまで日本国は至つて詰らない国であると思う」と内村は言う。このことは「日本は変わり得る」という思いが内村にあったことを意味する。内村は、日本を不快な国としながらも、内村には、日本は改革可能であるが故に改革したいという思いが強くあった。問題は、如何にして日本を改革するか、その方法である。その方法について、内村には試行錯誤があったのであるが、最終的には、個人（の良心）の改革から始めることを選択する。個人が改革されてこそ、社会が変わる。それが真の社会改良への途であると内村は、考えた。何故ならば、個人が変わるとは、個人と個人との関係が変わることであり、結局は社会のあり方の変革になるからである。[7]

内村は「二種の日本」を考えていた。日本には二種類あるのである。一つは「亡ぶべき日本」であり、「貴族、政治家、軍隊」の代表する日本である。もう一つは「亡ぶべからざる日本」であり、「勤勉正直なる」国民の日本である。そして「余輩が忠実ならんと欲するは此不朽不滅の日本」である。（「二種の日本」一九〇一年一一月、全九—四六四）

内村が「亡ぶべからざる日本」こそが、内村の理想の日本であり、「我が理想の日本はいまに来る」。そして「理想の日本、我はその来らんために働かんかな」と決意する。（「我が理想の日本」一九〇一年七月、全九―二二九）

現実の日本は、内村にとって憤怒の対象である。しかし、絶望しない。現実の日本を理想の日本にすることが可能だからである。そして、内村にとって、伝道が天職となったのは、伝道こそ個人の改良そのものであり、内村なりの社会改良の実践だっからである。[8]

もし、内村にとって日本が「異郷」であったとすれば、日本こそが「余の故郷」という篤き思いの故であったことは、言うまでもない。

註

（1）内村は一九〇一年一二月一九日から三〇日まで『万朝報』に「余の従事しつゝある社会改良事業」と題して短文を連載している。それを『よろず短言』（一九〇八年、警醒社）に再録しているが、見出しをつけている。その第一は、「今日の日本に生れ来りしを悔いたり」である。（全九―四六九以下、解題五四九頁参照）内村は言う。「余は勿論自から択んで明治の日本に生れて来た者ではない、是れ天運の然らしめる処であつて、余は唯余の不幸を諦めるまでゞある。」「余に取ては日本今日の社会に在ては嫌ふべき者は多くして愛すべき者は至て尠い、余は実に現今の日本に対して言ひ尽くされぬ程の不快の念を懐く者である。」内村にとっては「日本は余の故郷である」。しかしその日本が、明治政府に汚されていることを憤るのである。「余は日本らしくない此日本には全く愛想を尽かした者である。」と言う。何故、日本は内村にとって不快の念を覚えざるをえない国であったのか。

内村にとって、日本の社会が不快であり、居心地が悪いのは「日本の社会に在りては敵と味方とか判然としない」からである。日本社会では、誰が敵で誰が味方か判明しない、こうした社会では「真の深い堅い友誼は成立しない」と内村は考えていた。「敵味方を判明するは友誼を鞏固にする為に必要である。」（「不快なる日本の社会」一九二一年九月、全二六―五〇八）

内村は、一九二二年一二月号と翌月の一月号の『聖書之研究』に「御交際に就き広告」を掲載している。一月号の広告を引用する。

御交際に就き広告

小生に対し公然反対の態度を取らる、人と御交際を継けられる方は、自今小生に対し御交際を御断はり致します。尚ほ又斯かる方々に対しては小生よりも御交際致しませんから左様御承知を願ひます。之は何も反対者を憎むからではありません。友誼の純清を維持せんが為であります。故に西洋諸国に於ては紳士道徳として一般に行はる、所であります。敵と味方とを判明して初めて本当のフレンドシップが成立するのであります。日本人の間に之がないのは此道が欠けて居るからであります。私は

自今努めて此道を実行しやうと思ひます。御賛成を願ひます。（一九二三年一月、『聖書之研究』二七〇号、全二七―五六一）

（2）内村の特色は、「義務」を強調することにある。とくに「恋愛」に義務がともなうべきことを説く。「恋愛は義務に由て聖化せらるゝを要す、義務の無き所に頼むべき恋愛はない、楽まんが為の恋愛ではない、義務を果さんが為の恋愛である、而して義務の支持する所となりて恋愛は永久に衰へず其幸福は歳と共に加はる、恋愛を義務の外に求めて人は実は嫌厭を求めつゝある、腐蝕し易きものにして恋愛の如きはない、而して義務は恋愛の新鮮を維持する為の唯一の防腐剤である。」（「恋愛の自由に就て」一九二一年一一月、全二六―五三八）

こうした恋愛に義務が不可欠という考えは、当時の若者にどのように受けとめられたためであろうか。恋愛だけではない、すべてのことは、なにかの為に存在するのである。恋愛も、「神の為に、福音の為に、国の為に……」存在し、こうしたことの為に「一人の男が一人の女を恋ひ、又一人の女が男を愛する時に、そこに聖き美しき堅き恋愛がある」と内村は主張するのである。（同書）

（3）「基督信徒と社会改良」（一九〇一年九月、全九―三三二以下）を参照。当時内村は足尾鉱毒問題解決期成同志会に加わり、さらには「理想団」を組織するなど、社会改良に取り組んでいた。内村が日本社会の特色である「義理」に対する批判も内村なりの社会改良への提言の一つであった、と言える。

日本の社会（内村は東洋倫理として述べる）に義務がないわけではない。しかし、その義務は下のものが、上のものにたいして持つべきもので、上のものが下のものに義務があるとは考えないのである。（「東洋的社会組織」一八九九年二月、全六―四〇三）

（4）日本で基督者の数が、人口の一％［〇・五％とも言われる］にも満たないことの理由をしばしば問われる。私は、人口の一％［〇・五％］も基督者がいることに驚きと感謝を覚えるものである、と答えることにしている。どこまでも日本人でありながら、同時に基督者であることは、きわめて困難なのである。内村だけでなく、日本人基督者の共通の課題である。内村によれば、「真の日本人なくして日本に於て真の基督者がない。」真の日本人であることによって、真の基督信者となることが出来るというのが内村の見解である。その真の日本人とは「正直なる、忠実なる、義理を重じ、道を行つて誤らざる日本特有の男女である。」（「基督信者と日本人」一九二六年九月、全三〇―五九）

そのことは、基督教を日本化することではない。「日本化されたる基督教は俗化したる基督教と成りて終はる」のである。（「日本人と基督教」一九〇四年八月、全一二―三四九）

（5）内村は決して「情」の持つ意味を知らなかったのではないことを再度確認しておきたい。内村は「情の人」でもあった。内村にとって「人情」の持つ意味に注目されたのは、今高義也氏である。今高氏は平成八年度の日本思想史学会大会で「内村鑑三の思想形成における『人情』の問題」

と題して研究発表をされている。内村の思想形成において「人情」の問題は重要である。今高氏の研究に期待する。

(6) *Bushido* の原文は『新渡戸稲造全集』第一二巻、教文館、三七頁以下を参照し、訳文は同全集、第一巻、四三頁以下の矢内原忠雄訳によった。

(7) 渋谷浩氏が述べているように、「人の良心を根底から改良することが内村鑑三のいう社会改良であった。」『近代思想史における内村鑑三』新地書房、一九八八年、三六七頁。

(8) 前掲の「余の従事しつつある社会改良事業」の「その九」は「ついに余の天職に入る」であり、内村は俗化されない事業を「余は基督教の伝道において発見した」と言うが、内村にとって伝道こそ、社会改良の最もよき方法と考えたのである。(全九—四七九)

参考文献

1、内村鑑三『世界の中の日本』内村鑑三選集 四、岩波書店、一九九〇年(この論文に引用した資料の多くは本書に収録されている。)

2、源 了圓『義理』(一語の辞典)、三省堂、一九九六年

3、小原 信『内村鑑三の生涯』、PHP文庫、一九九七年

4、林由美子「『菊と刀』研究—『義理』を中心に—」(一九九七年度武蔵大学卒業論文)

(本論は、大会当日の発題に注をつけるなど、加筆をしたものである。全とあるのは、岩波書店『内村鑑三全集』全四〇巻のことであり、巻号と頁を次に記した。)

(東洋英和女学院大学教授)